

## 5th Conference on Arts-Based Research and Artistic Research にみる Arts-Based Research の国際的な研究動向

笠原 広一\*

美術科教育学分野

(2018年6月29日受理)

KASAHARA, K.: International Research Trends of Arts-Based Research from the Report and review of 5<sup>th</sup> Conference on Arts-Based Research and Artistic Research. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 70: 45-64. (2018) ISSN 1880-4349

### Abstract

This research reports on the outline of “5<sup>th</sup> Conference on Arts-Based Research and Artistic Research” held in Liverpool, England in March 2018, and examined international research trends of Arts-Based Research (ABR). Recently, ABR has also expanded not only to Europe and North America, but also to Latin America and Asia. The characteristics of ABR in this conference are as follows. 1) The temporary increase of the practice in school education. 2) A misunderstanding is born within the acceptance and expansion of ABR. 3) Visualization experiment of the exploration process conducted by young researchers. 4) Difficulty of considering conventional art production/practice, as it is ABR. 5) Extension to practical social practice by ABR action research in community based practice. 6) Engagement in the realistic personal and social problems of confrontation with discrimination and identity. 7) Reason why people engage in ABR.

**Keywords:** 5<sup>th</sup> Conference on Arts-Based Research and Artistic Research, Arts-Based Research, A/r/tography.

*Department of Art Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究は2018年3月に英国リバプールで開催された5th Conference on Arts-Based Research and Artistic Researchの概要を報告し、Arts-Based Research (以下、ABR)の国際的な研究動向の視点から発表内容とカンファレンスを考察したものである。ヨーロッパや北米以外の中南米にもABRは広がっており、筆者らのアジアからの発表も含め、各国の多彩な事例が紹介された。全体の特徴的な論点は以下の通りである。1) 学校教育での実践の暫時的増加。2) ABRの受容と拡大の中で理解のズレが生まれている。3) 若手研究者による探究プロセスの視覚的表現の試み。4) 従来からの芸術制作/実践をそのままABRと見なすことの困難さ。5) コミュニティでのABRアクションリサーチによる現実的な社会的実践への拡張。6) 差別やアイデンティとの対峙という現実的な個人的かつ社会的問題への関与。7) 人々がABRへとエンゲージする理由。

---

\* 東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

## 1. はじめに

近年、国際的な美術教育の動向の中で、Arts-Based Research (以下ABR)などの、芸術制作/実践に基づいた研究や探究的な活動に着目した取り組みに注目が集まっている。本稿は2018年3月に英国リバプール市にある美術館テート・リバプール (Tate Liverpool) で開催された5th Conference on Arts-Based Research and Artistic Research<sup>1</sup>の国際会議の内容を取り上げる。筆者は前回2016年の4th Conferenceから参加しているが、前回の内容については小松佳代子(2016)が詳細を報告している。日本からの参加者は極めて少ないが、ABRの国際動向を継続的に捉えながら日本での展開可能性を検討していくために、本稿もABRに関する最新動向を分析し、今後のABRの展開と日本での発展可能性の模索へとつなげていきたい。

ABRの本格的な紹介は国内ではまだ始まったばかりであり、この1、2年で小松(2017b; 2018a)による国内初のABRを扱った書籍が発刊された状況である。2007年頃から度々言及され論文も少しずつ発表されてきたが、ABR研究が1990年代初等から始まっていることを考えると、やっと日本でもABR研究が本格的に始まる段階に入ってきたと言える。

ABRは芸術に基づく特性や手法、質的思考などを活かした物事の探究であり、研究のアプローチである。日本語の呼称については「ABR」「アート・ベース・リサーチ」「アートベース・リサーチ」「アーツ・ベースト・リサーチ」など様々である。小松(2018a)は美術大学の専門教育の現場から、芸術制作のただ中における省察それ自体を研究と考える視点から、美術制作の過程における省察と探究をABRの本質と捉え、「ABR」を「芸術的省察による研究」と定義している。「モノとのやりとりの中で思考のレイヤーを積み重ねていくことを『芸術的省察』と呼びたい。省察とは、物との対峙による自己への内省と同時に、意味の世界へとモノを介して探究する思考様式である」(小松, 2018b: 192)とし、ABRはそれを可能にするものであり、そうした省察を生むかどうかに美術と教育が結びつく臨界点があるとする。このことは「Arts-Based」を、芸術を方法として用いる研究や探究として方法論的にのみ捉えるのものではなく、芸術制作における質的知性が生成する知の在り様を考察する中から生み出した、芸術に根ざした探究の質的特性を考察したABR理解であり、十分に検討に値するものである。

また、社会学からABRにアプローチする岡原正幸ら(2016)は「学術的な研究作業のプロセス全体で、と

くに最終的なアウトプットにおいて文字媒体を主とするテキストではなく、写真、映像、パフォーマンス、ダンス、演劇、あるいは平面、立体、インスタレーション、アートプロジェクトなどの美術、サウンドや音楽、さらに文字媒体だとしても小説や詩や戯曲などの文学を媒体として公開される研究スタイル」(岡原ら, 2016: 65)と説明している。

おそらく美術制作そのものの中にある芸術的な知の在り様に焦点を当てることで見えてくるABRと、社会科学的な学術研究の新たな可能性として、あるいはそれらの方法として芸術に焦点を当てることで見えてくるABRには少しずつ違いがあり、そこで具体化されるABRのかたちにも差異があるだろう。ABRが生み出され形作られていく取り組みは現在も進行中であり、様々な対話を含みながら展開している。本稿ではそうした議論も参照しつつ、ABRの概念的検討は既出の研究も含め別稿で取り組むこととし、表記は「ABR」「Arts-Based Research」として進める。

## 2. 芸術を基盤とする制作と研究の取り組みについて

ABRは1990年代に人文・社会科学で起こった質的転回の流れの中で、カリキュラム研究や芸術教育研究に取り組んだE.W.アイズナー (Elliot W. Eisner)がT.バロン (Tom Barone)とともにスタンフォード大学で始めた研究会に始まる、芸術と教育研究の新しいアプローチ創出の取り組みである。芸術制作/実践とその過程でなされる感性的で質的知性に係る探究過程を、芸術制作/実践と研究の同時的な取り組みとして位置付ける。それは芸術と科学、芸術と教育との間をつなぐものであり、人間の経験についての新たな理解を生み出し、芸術活動の特性に由来する教育と研究の実践理論となるものである。ポストモダン思想の影響も大きく、ナラティヴや質的研究、ポストコロニアルなどの人文・社会科学が直面し取り組んでいた問題背景を共有し、美術教育においては1980年代のDBAEによる美術教育の知的特性に関する議論の先に位置するほか、美術教育学が学的基盤を形づくる上で不可欠であったリサーチメソッドの議論とも重なりながら、ABRの理論と実践の構築はこの四半世紀の間進んできた。

こうしたアプローチが生まれる背景的な人文・社会科学の状況について少しか確認しておく。社会科学研究とリサーチメソッドの視点からABR研究に取り組むP.リーヴィー (Leavy, 2015)によれば、デカルト的な実証主義に基づいて社会的な事象を理解しようと

する社会科学の流れのなか、1950年代から1970年代にかけての公民権運動や社会正義、女性運動などの市民運動と呼応した人文・社会科学研究は、これまで語られてこなかった当事者視点からの語りや (narrative)、一般化して括ることのできない個々人の声、支配的な研究のパラダイムや研究方法からは見えてこない状況認識や、掬いとることのできない事象へと研究者の意識を広げてきた。同時にポストモダン思想を背景に様々な質的研究のアプローチが創出され、心理学や教育学、社会学などでも従来の知の考え方に対する異議申し立てが広がったとする。教育研究においては認知科学的な教育理論の広がりの中で、芸術の固有性に根ざした芸術教育理論や教育学の新しい形について探究が試みられ、ABRはそうした取り組みの中で生み出されてきた。その後1990年代から2000年代に入り Arts-Basedのアプローチは様々な目的や研究方法の特性、実施されるフィールドの広がりに応じて以下のようなバリエーションが生まれてきているとする (2015: 5)。

- ・ A/t/tography (アートグラフィー)
- ・ Alternative forms of representation (オルタナティブな表現形式)
- ・ Aesthetically based research (美的原理に基づく研究)
- ・ Aesthetic research practice (美的な研究実践)
- ・ Art as inquiry (探求としての美術)
- ・ Art practice as research (研究としての美術実践)
- ・ Art-based enquiry (美術に基づく問いかけ: ABE)
- ・ Art-based inquiry (美術に基づく探求: ABI)
- ・ Art-based research (美術に基づく研究: ABR)
- ・ Artistic inquiry (芸術的な探求/芸術制作による探求)
- ・ Arts-based research (ABR) (芸術に基づく研究)
- ・ Arts based social research (ABSR) (ABRによる社会調査)
- ・ Arts-based qualitative inquiry (芸術に基づく質的調査)
- ・ Arts in qualitative research (質的研究における芸術)
- ・ Arts-based educational research (ABER) (芸術に基づく教育研究)
- ・ Arts-based health research (ABHR) (芸術に基づくヘルス研究)
- ・ Arts-based research practices (芸術に基づく実践)
- ・ Arts-informed inquiry (芸術の知識に基づく探求)
- ・ Arts-informed research (芸術の知識に基づく研究)
- ・ Critical arts-based inquiry (芸術に基づく批判的探求)
- ・ Living inquiry (生きた探求/生きることと共にある探求)
- ・ Performative inquiry (パフォーマティヴ/実演を用いた探求)
- ・ Poetic science (詩的科学)
- ・ Practice-based research (実践に基づく研究)
- ・ Research-based art (RBA) (研究に基づく美術)
- ・ Research-based practice (研究に基づく実践)
- ・ Scholartistry (学識の芸術性)
- ・ Transformative inquiry through art (美術をとおした変容的探求)

これらのアプローチは、教育学や社会学などの分野に関連して取り組まれ、従来のパラダイムでは十分に射程に入れられてこなかった曖昧で揺らぎのなかにある両義性や矛盾を抱えた人間の経験と存在の位相を捉え探究しようとしている。それについて言葉や理論だけでなく、感覚的 (sensory) で身体的 (somatic) な体験と省察、様々な芸術制作/実践の方法とプロセスを織り交ぜながら、他の方法では十分に知覚し、可視化し、思考の対象にできなかった物事を扱う新しい教育学 (pedagogy) としてその理論と実践の生成・構築が進められてきている。

### 3. 日本でのABRに関するこれまでの動向について

日本の美術教育では1980年代にアイスナーらのDBAEなど美術の知的側面に注目した実践理論が紹介された。その後アイスナーがバロンらとともに進めた、芸術に固有な知の在り様、芸術の持つ質的知性に対する探求の取り組み (Barone & Eisner, 2012) は、日本ではほとんど紹介されてこなかった。ABRが芸術や美術、美術教育研究に大きく関わる議論であるにもかかわらず、1980年代以降リサーチメソッド整備の必要性 (長町, 1984) や実践研究向上の必要性 (安東, 1998; 金子, 2010) などの関連する問題提起もなされてはきたが、日本では1990年代からの新学力観による主知主義から経験主義への移行といった状況の中で、こうした動向は十分にフォローされてこなかった。

日本でABRにまず注目したのは教育学である。秋田 (2007) は『はじめての質的研究法: 教育・学習編』でアイスナーらの取り組みを紹介し、教育研究において芸術の美的特性を用いることで可能になる新たな質的研究の可能性に言及し、質的研究の新たなアプローチとしてABRを紹介している。その後、演劇教育研究において高尾 (2010) が事例研究やエスノグラフィー、歴史研究等の記述的・解釈的研究やアクションリサーチ、実験研究や計画実験等の干涉主義的方法論といっ

た、従来の研究方法に対する第三の方法論として、ショーンの反省的実践家事例研究とともに「芸術と芸術の知識に基づいた探求 (Arts-based and Arts-informed Enquiry)」や「ナラティブ研究」などを組み合わせたメタ方法を論じており、これらのアプローチによる人文・社会科学の実践研究の質的向上の可能性に言及している (2010: 71)。

その後の国内のABRに関する動向については小松の『美術教育の可能性：作品制作と芸術的省察』(2018a) や臨床教育学に寄稿した論考 (2017b) に書かれているように、北川 (2013) によるポスト実証主義研究としてのABRの可能性や金田 (2014) によるホリスティック教育の視点からの論考などがある。

それ以外にも実践をベースにした研究も進んでおり、筆者は2014年度から幼児教育の美術教育実践の教員養成カリキュラムでArts-Basedアプローチの実践を行い、教員養成への導入の中での成果と課題を考察している (Kasahara, 2015; 笠原・山本・坂倉, 2017)<sup>2</sup>。他にも美術制作に関するABRの実践論文 (Hara, 2016) など、海外の状況にも共通するように、実践と理論を往還しながら研究が進められてきている。

また、当時、小松らが東京藝術大学で取り組んでいたABR研究だけでなく、岡原による慶応義塾大学での実践と研究や日本社会学会でのABR分科会の開催などのアートベース社会学の精力的な取り組みも進んでいる。東京学芸大学では2016年度より大学院にてABR及びA/r/tography (以下アートグラフィー) の理論実践を取り入れた演習や国際セミナーを開催してきている。

またABR関連の中でもアートグラフィーに関連したものでは、2016年2月に筑波大学にて直江俊雄がカナダのブリティッシュコロンビア大学からリタ・アーウィン (Rita L. Irwin) 教授を招聘し、「アトライティング教育によるグローバル・アートコミュニケーション人材の育成」の一環としてアートグラフィー入門セミナーを開催している。小松と筆者は2017年にはスペインのバルセロナ大学のヘルナンデス教授 (Fernando, HERNÁNDEZ) による講演会とワークショップを開催し、ABRの理解と発展に向けた取り組みを進めた。同年4月には同じくリタ・アーウィン教授 (Rita L. Irwin) 教授とコンコルディア大学のアニタ・シナー准教授 (Anita Sinner) を東京学芸大学に招聘し、ABRやアートグラフィーの実践、ABRに基づく博士論文研究の国際動向を紹介してもらう美術教育国際セミナーを開催し、全国から100名ほどが参加した。2017年8月に韓国大邱市で開催されたInSEA World Congressでは

笠原 (Kasahara, 2017)、小松ら (Komatsu & Redondo, 2017) がArts-Based Inquiry/Researchの研究発表を行うなど、理論受容だけでなく日本の文脈におけるABRの批判的検討や実践化も進んでいる<sup>3</sup>。

このように日本におけるABR研究は少しずつ広がりを見せており海外とのコラボレーションも急速に展開している。カンファレンス情報も共有しながら徐々に日本からの成果発信にもつなげていきたい。

#### 4. 5th Conference on Arts-Based Research and Artistic Researchでの研究発表の概要

ここからカンファレンスで聴講した発表概要と筆者の意見を述べていく。発表は一室で連続して行われたが、一部聴講できなかったものはタイトルのみを示す。既にフルペーパーがウェブサイトに掲載済みのため、各発表の詳細はそちらをご参照いただきたい<sup>4</sup>。

【2018年3月14日 (水)】

(1) The Collaborative Poetics Network: A Pilot Study Exploring

JOHNSON, Helen. University of Brighton (UK)

WIMPENNY, Katherine. Coventry University (UK)

「協同的な詩作の実践ネットワーク：試験的な研究と探索」(英国)

協同的な詩の取り組みによる領域横断的な実践を試み、実践の質的な側面やコミュニティを結びつける問題文脈への自覚を促す詩による実践事例が紹介された。

(2) Acquiring New Knowledge and a Multidisciplinary Language in Arts-Based Research—A/r/tographic Research.

GUILAT, Yael. Oranim Academic College of Education, KiryatTiv'on (Israel)

ARIE, Sigal. Oranim Academic College of Education, KiryatTiv'on (Israel)

「ABRとアートグラフィーにおける新たな知と複数学問領域の言語獲得について」(イスラエル)

ABR理論の脱構築を試み、制作との行き来とそのプロセスを支える理論の整理を行った。ABRのプロセスには現象学的視点が含まれており、ABRの認識論、研究手法について興味深い理論研究がなされた。

(3) 'ma' and the space in-between: A China-Canada pedagogical exchange.

SINNER, Anita. Concordia University, Montreal, (Canada)

WHITE, Boyd. McGill University, Montreal, (Canada)

HU, Jun. Hangzhou Normal University, Hangzhou (China).

「‘間’そしてあいだにある空間：中国とカナダの教育学的交流」（カナダ・中国）

カナダで生み出されたアートグラフィー研究の重要な概念である「あいだ (in-between)」について、日本の「間 (ま)」という東洋的なあいだと空間にまつわる論考を対比させ「あいだ (in-between)」についてのカナダと中国とのあいだの多文脈的な理解の広がりを生み出すことを試みた研究事例である。

(4) Poetics of Spaces. Museum as a Place to Talk with Environment.

HUERTA, Ricard. University of Valencia (Spain).

ALONSO-SANZ, Amparo. University of Valencia (Spain).

「空間の詩学：環境を語る場としての美術館」（スペイン）タイトルのみ

(5) Something in ‘Nothing’: The Generativity of Negative Space.

LEBLANC, Natalie. University of British Columbia (Canada)

SHIELDS, Alison. University of British Columbia (Canada)

「‘無’の中に在る何か：陰の空間が持つ生成力」（カナダ）

何かが「ない：無」と感じられるネガティブ（陰）な場所（空間）について、誰かには見えて誰かには見えないもの、場所への興味関心などを写真によって捉え、省察を試みる実践を提起し、ABRの探究が空間において何かを開発し、パフォーマンスを引き込む実践となる可能性を論じた。

(6) Becoming Listening Bodies: Sound walking as pedagogy of sensation.

ROUSELL, David. Manchester Metropolitan University (UK)

GALLAGHER, Michael. Manchester Metropolitan University (UK)

WRIGHT, Mark. Manchester Metropolitan University (UK)

「身体に耳を傾けていくということ：感覚の教育学としての音の散策」（英国）

3歳から6歳の子どもと街の音を散策する活動の中で、子どもがどのように音を聞いているのかを、子どもの視点を記録する高速度カメラによるバイオアクティブデータの変化に基づく臨床研究によって明らかにすることを試みた研究。ABRは経験の質的側面に注

目するが、そのデータ収集や分析方法は多様である。しかし方法としてアートを用い、知覚体験を扱った研究であるがゆえに、ABRによる研究である必要性がわかりにくい点があった。実証主義的アプローチとABRの関係理解についても少し疑問点が残る。参加していた他の研究者からもそうした意見が聞かれた。ABRに取り組む以前に行っていた研究のパラダイムの影響であろうか。他にもそうした研究がいくつかあり、ABRへの関心が広がってきているだけに、その歴史と理念と理論の確認が今後重要になると考える。

(7) Art-Based Action Research on Contemporary Art and Environmental Politics.

HUHMARNIEMI, Maria: University of Lapland (Finland).

「現代美術と環境の政治学についてのアート・ベイスト・アクションリサーチ」（フィンランド）

ラップランド地方における子どもの自然体験に刺激を受け、芸術家とのコラボレーションによって現代アートの作品制作と展示を行った実践を紹介。その上でABR, AR, a/r/t, Practice-led Researchなどのタイプの異なる美術の制作と実践にまつわる研究を社会的なアクションリサーチや個人的なオート・バイオグラフィー等の視点で分類した。実践についてはそれがなぜABRなのかのかわかりにくく、実践と後半の分類の研究が別々のものとなっている印象を受けた。作品制作や展示を行ったからといってそれがABRとなるわけでない。リサーチであることが十分伝わる必要がある。こうした試みを議論する中で新たな理解や整理を行うこともカンファレンスに必要な役割であろう。

(8) The meddlesome poetics: A|r|t|ography as a pedagogical practice in Basic Education in Brazil.

SASSO, Leisa. University of Brasilia (Brasil)

「うんざりするほどたくさんの詩：ブラジルにおける基礎教育課程でのアートグラフィー」（ブラジル）

大学基礎課程での学生との実践をアートグラフィーとして発表した。「権力の下にある教育ではなく、権力に教育を求めること」「アイデンティティは教育の基本」「アートとともに教育を変える」「知を‘再’領土化する」「関わること (involving) の可能性」といった言葉とともに、学生が大学や社会の様々な場所でアートの表現やプロジェクトをとおして世界と交渉し、自分たちの声を発信していく実践がたくさん写真とメッセージとで紹介された。パウロ・フレイレ、アウグスト・ボアールなど抑圧からの解放と社会形成への参画のための芸術教育がアートグラフィーとして

描き出されていた。「うんざりするほど」というのは実践のエネルギーをユーモアで表しており、発表者のエネルギーも印象的であった。

(9) Expanding the formative value of cartographies: from research to teachers' development and engagement.

HERNÁNDEZ-HERNÁNDEZ, Fernando. University of Barcelona (Spain)

SANCHO-GIL, Juana M. University of Barcelona (Spain)

「地図の形式的価値の拡張：研究から教師の発達と関与へ」(スペイン)

三つの中学校から20名の教師が集まり、絵地図制作を行った実践である。予期しない (unforeseen) ことや驚かされるようなことに注意を払うこと、生活の中で身体は政治的であり、そこに注意を払う必要があるとし、教師にどこでどのように自分は学んだのか、自分自身の学びの中にある宝物を絵地図化するワークショップを実施した。描いたり、書いたり、話したり、デジタルカメラやプリンターを使って写真を貼ったりしながら、自分が教師であることに関連するものも持ち寄って絵地図を作る。教育が置かれている状況とコンテキストを捉え直そうとするならば、教育とアートに関わりながら生きる教師自身が文脈の中で自己を捉え直す必要があるということだろう。こうしたビジュアル・エスノグラフィーによる ABR の探究が自己理解、教育の捉え直しの契機となる過程を生み出す。

(10) Candy and Cake: Criticizing Finnish and Nordic Whiteness.

KALLIO-TAVIN, Mira. Aalto University, Helsinki (Finland)

「キャンディーとケーキ：フィンランドとノルウェーの白さについての批評」(フィンランド) タイトルのみ

(11) Gnoseology of the artistic research process and its transference.

MORENO-MONTORO, Maria-Isabel. University of Jaen (Spain)

ESPÍRITU-ZAVALZA, Martha-Patricia. University of Jaen (Spain)

「芸術実践による研究の過程における認識の論理とその転移」(スペイン)

身一つ(裸)で自然環境と関わり、自然と一体化するような探究的な表現活動を行う事例(芸術制作/実践)を通して生み出される、プロセスと知に焦点を当てた映像表現によるプレゼンテーション。映像の中で表現行為は興味深い、芸術制作/実践の紹介を越

えて研究として何を提起しようとしたかは曖昧に感じた。ABRでもそうしたものがあがるが、ARになるとそれがリサーチであることやリサーチとして提起されているものが何なのかさえよく分からないものも少なくない。ARであるとしても制作がリサーチだと考えるのならば、社会科学などと同じではないとしても、また、捉え表現する物事の質が言葉で表現し難いのだとしても、他者に向けた共有可能性を志向し、言葉で表現し難い何かのあいだにある緊張関係自体が見えてこない、個人的な美術制作にしか見えない。いずれにせよ「R:リサーチ」として美術制作を示すならば、社会科学や自然科学とは異なる要件だとしても、そのことへの理解を示す必要があり、目的や内容、方法的な吟味が自覚的になされる必要性があるのではないだろうか。

(12) Touching, holding, diffracting, (re) presenting: being with data and place.

PHILLIPS, Louise Gwenneth. The University of Queensland (Australia)

「触れること、抱えること、回折すること、表現すること：データと場と共に在ること」(オーストラリア)

詩の朗読によるパフォーマンス型の発表である。ほとんどが詩の朗読であるため、タイトルに示したことがどのように探究されたのか、表現されたのかはわかりにくかった。詩的な表現の朗読となると、(英語の)ネイティブスピーカーではない者には(筆者も含め)感じることはできたとしても言葉のニュアンスはわかり難いようであった。

(13) Current Status and Possibility of A/r/tography in Asian Context: The Session of "Re-thinking on Writing and Graphy in Art Education.

KASAHARA, Koichi. Tokyo Gakugei University (Japan)

HU, Jun. Hangzhou Normal University, Hangzhou (China)

「アジアにおけるアートグラフィーの現状と可能性：『書く・グラフィー』を考える研究会の取り組みから」(日本・中国)

筆者が杭州師範大学(中国)のジュン・フー教授(Jun Hu)と行ったアートグラフィーの取り組みと受容に関する日本と中国からの共同発表である。2017年11月に東京学芸大学で実施した「アートにまつわる『書く・グラフィー』を考える」研究会<sup>5</sup>の発表について紹介し、日本で取り組まれた幾つかのアートグラフィーに関する実践研究を紹介した。筆者による3.11以降のフクシマと自分との関係性を問うアートグラ

フィーや、演劇教育研究の高尾隆（東京学芸大学）や吉田梨乃、岩田さや子ら大学院生らによるインプロのファシリテーターが生きる「あいだ」の空間にあるアイデンティティの模索、春野修二による戦争の記憶を保存しようとする市民との共同実践における、アーティストであり研究者であり教師である実践者の取り組みや、中村翔太郎によるたぐさんの日記のようなノートへの描画や自己省察の取り組み、森本謙によるカナダのプリティッシュコロンビア大学での詩によるワークショップ実践などの概要が報告され、日本で進みつつあるアートグラフィー実践の状況が提示された。続いてジュン・フー教授は杭州師範大学にアートグラフィー・リサーチセンターを開設し、昨年10月に第一回アートグラフィー・アジアシンポジウムを開催した。筆者も招待され講演を行った。彼の発表では特別支援学校や大学での実践が紹介され、アートグラフィーを中国語で「芸游学」と訳すコンセプトも紹介された。

質疑ではバルセロナ大学のヘルナンデス教授からアートグラフィーの受容についてのコロニアルな問題を避けるためには何が必要かという問いが発せられた。日本の美術教育では「リサーチ」や「書く」という視点があまり含まれておらず、美術制作と記述的な省察・探究の往還によるアイデンティティ形成などにもあまり馴染みがないこと（この点は中国も同様であるとのこと）、美術は自己表現としてはよく理解されるが、知を創出する一つの技法であり形式であるという理解は希薄である点をまず述べた。そしてカナダなどのABRの取り組みに蓄積のある国や文化圏とは異なる現状認識があることを話した。その上でアートグラフィーの概念や実践を構成する要素や条件を日本の文脈において吟味しながら展開していく必要があることを述べた。筆者個人としては美術教育を通じたアイデンティティの形成は非常に重要で、自己と芸術とのアートグラフィー的関わり合いは美術の自己表現論よりも違和感が少ない。相互の差異を不可視にしてしまう同調圧力といった日本的なコミュニケーションや相互関係において、ABRやアートグラフィーが不可視のものに形を与えその意味や価値の再考を促す可能性を持つとすれば、ABRやアートグラフィーは日本において他の国々や文化圏とは異なる意義と形を持つことになるかもしれない。

現時点では理論研究に着手すると同時に、個別にアートグラフィーに関連する個々人の取り組みに焦点を当て、日本の文脈におけるアートグラフィーの形を描き出す取り組みを進めている。その先の展開を考え

ればフェルナンド教授の指摘は重要である。ABRがヨーロッパや北米地域を越えてアジアにも広がってきており、今後確実に必要な論点となるだろう。

(14) Art-based action research: participatory method for decolonization in the North and the Arctic.

JOKELA, Timo. University of Lapland (Finland)

「アーツ・ベイスト・アクションリサーチ：北欧及び北極圏地域における脱植民地化のための参加の方法論」（フィンランド）

フィンランドなどの北欧や北極圏エリアで実施されたABRによってコミュニティのメンバーをつなぐ活動である。グローバリゼーションによる植民地化に対抗していくための問題意識に根ざした実践研究である。ABRにParticipatory Action Researchを組み合わせる理由についての質問に対しては、アーティストの活動領域と文化の領域が分かれている状況をつなぐ必要があるとし、そのためにはABRによるアクションリサーチが有効だと述べている。

(15) Worlds that can hardly hold up: Art and learning as ambivalent practices of study.

TRAFÍ-PRATS, Laura. Manchester Metropolitan University (UK)

「つかみ難い世界：研究の相反する実践としてのアートと学習」（英国）タイトルのみ

(16) Another way of learning is possible through the Arts Based Research.

ABERASTURI-APRAIZ, Estibaliz. University of the Basque Country (Spain).

GUERRA-GUEZURAGA, Regina. University of the Basque Country (Spain)

CORREA-GOROSPE, José Miguel. University of the Basque Country (Spain)

「ABRを通じた異なる学習方法が可能性を持つ」（スペイン）タイトルのみ

(17) Head mounted, chest mounted, tripod or roaming?: The methodological potentials of a go pro camera and post-structural possibilities for doing visual research with child participants differently.

CATON, Lucy. Manchester Metropolitan University (UK)

「頭に搭載、胸に搭載、三脚か放浪か？：子どもの参加者の違いに関する視覚的な調査のためのアウトドア用カメラとポスト構成主義の方法論的可能性について

て」(英国)

子どもの動きを頭と胸に搭載したアウトドア用カメラで撮影し、その映像から子どもが捉えているものを事後的に映像から検討する研究実践が示された。これも映像やデジタルデバイスによって取得したデータに基づく分析方法の紹介であるが、ABRとの関係があまり見えてこない。

【2018年3月15日(木)】

(18) Visual Information in Research: Tacit Knowledge and Communities of Agreement.

SIEGESMUND, Richard. Northern Illinois University (USA)

FREEDMAN, Kerry. Northern Illinois University (USA)

「研究における視覚情報：暗黙知と了解のコミュニティ」(米国) タイトルのみ

(19) Photo-essays: reflections between the education, academic and artistic spaces.

CELESTE-MARTINS, Mirian. Universidade Presbiterian Mackenzie, São Paulo/ UPM (Brasil)

EGAS, Olga. Universidade Federal de Juiz de Fora /UFJF; UPM (Brasil)

DEMARCHI, Rita. Instituto Federal de Educação, Ciência e Tecnologia/IFSP; UPM (Brasil)

「フォトエッセイ：教育と学術と芸術的空間との間の省察」(ブラジル) タイトルのみ

(20) The challenges of sociocultural changes in the North: Can art based action research promote a dialogical space?

HILTUNEN, Mirja. University of Lapland (Finland)

KORSSTRÖM-MAGGA, Korinna. University of Lapland (Finland)

「北欧における社会文化的な変化への挑戦：アート・ベースト・アクションリサーチは対話的空間を促進するか」(フィンランド)

北欧の少数民族サーミ人のコミュニティ(1996年からサーミ人による自治が行われ7.5万人が居住)において、脱植民地化の視点からサーミ人の文化に焦点を当てた参加型の美術活動と写真展示を行ったプロジェクトを紹介した。社会・文化的な参画型の実践が、シンボリックな芸術表現や身体活動、内的・精神的な表現スキル、対話的なプロセスによって支えられている実践構造が示された。フィンランドの他の発表同様、北欧ではグローバリゼーションの植民地主義的な動向で、固有の文化やコミュニケーションの持続可能性に関する社会文化的な参画型(participatory-practice)

ABRの取り組みが多数報告されている。

(21) Drawing the future today: a collaborative partnership

CHAITA, Sophia. University of the Aegean (Greece)

LIARAKOU, Georgia. University of the Aegean (Greece)

GAVRILAKIS, Costas University of Ioannina (Greece)

「今日の未来を描く：協働的なパートナーシップ」(ギリシャ)

ギリシャの小さな島の持続可能性を美術活動によって構築する学校での美術教育実践である。最初に自分たちの島について描いた時の子どもたちの絵は、観光で知られるイメージで描かれており、その絵には「自分たち」が描かれていないことに気付く。そこにテキスト(言葉や感想)や省察を加え、自分の島を見つめ直し、観光のイメージや外から(外向け)の視点からではない、そこに住んでいる自分たちの島として自分と島を捉え直していく取り組みをアートグラフィーの実践を通して行った。

(22) Video mapping and Virtual Reality: A Visual A/r/tography in contemporary art museums.

ROLDAN, Joaquin. University of Granada (Spain).

LARA-OSUNA, Rocio. University of Granada (Spain).

GONZALEZ-DE-LA-TORRE, Antonio. University of Granada (Spain).

「ビデオマッピングとヴァーチャルリアリティ：現代美術館におけるビジュアル・アートグラフィー」(スペイン)

アートグラフィーは研究だけでなく教育の方法でもあるとし、ピカソの絵を元絵にしてテープを貼って絵を描く活動や、マイクロスコープを使って自分の体を普段とは異なる微視的視点で観察(鑑賞)し、そこから対話による気付きを促すことを意図した実践を紹介した。インタラクティブなドローイングなど、テクノロジーを使った美術表現による探究である。アートグラフィーとあるが、実際にはどの点でアートグラフィーであるかがわかりにくく感じた。

(23) Re/de/gendered arts-based research and art education collaboration.

SUOMINEN, Anniina. Aalto University, Helsinki (Finland)

PUSA, Tiina. Aalto University, Helsinki (Finland)

「再・脱・ジェンダー化されたABRと美術教育の協働」(フィンランド)

フェミニスト・デモクラシー、ジェンダー・センシビリティを美術教育においてパフォーマンスに提



示する取り組みを通じた学習活動と、ABRによるジェンダーの意識化、アクティビストのアプローチを協働化する取り組みを提示した。

(24) Tracing understandings: Developing research affinities through cartographic exploration.

WICKS, Jennifer. Concordia University (Canada)

CARRASCO-SEGOVIA, Sara University of Barcelona (Spain)

「理解をなぞる：地図制作的な探究を通じた研究の関連性の発展」(カナダ・スペイン)

博士論文研究の取り組みを通して、動きや感情、身体、作品、非知の知など様々な情報や概念が、リズム状に生成し展開していく探究過程を文字(概念)と矢印のベクトルの動きによるムービー化して動画で上映しながら、その出来事や知の生成の動態を論じた。美術制作を通して仮説生成的に探究が展開していくABRのプロセスは地図制作に例えられるが、その「パフォーマンスな探究を、動画でパフォーマンスに表現する」ことを試みたユニークな発表である。こうした動的な概念説明を可能にするアプリケーションやデジタルテクノロジーを活用した若手研究者による視覚化の試みによって、ABRの表現/発信の仕方にも新しいアプローチが入ってきている。

(25) From Female Body, Identity and Representation to the Contemporary Art. Life of women after migration in Finland: A Dream That Came True?

SADATIZARRINI, Sepideh (Rahaa). Aalto University, Helsinki (Finland)

「女性の身体、アイデンティティと描写から現代美術へ。フィンランドへの移住後の女性の生活：夢は実現したのか?」(フィンランド)

発表者は英国からビザが発行されなかったために参加することができなかったため、webにアップしたビデオ映像による発表を行った。移民であり女性という身体性を持つ自身のアイデンティティについて現代美術の実践を通して考えるというテーマであるが、ビザの発給に様々な差別的扱いがあることを訴えつつ、単一ではなく様々な人種や背景を持った人々が入り混じることの重要性や、どこの土地にも属していない自分について考える中で、自分は「人間」「人間性」に属している(belonging)のだとし、アートがこうした人間の多様性や所属(belonging)の問題を浮上させる可能性を持つことを論じた。

(26) Exploring European citizenship through contemporary art and blogging. Analyzing pupils' artworks from art education action research project in elementary and secondary school levels.

MANNINEN, Annamari. University of Lapland (Finland)

「現代美術とブログによるヨーロッパの市民性の探究：小中学校の児童生徒の美術作品の分析による美術教育のアクションリサーチ」(フィンランド) タイトルのみ

(27) Overflowing University: pulling the thread towards an embodied learning / caring relations on the fly...

VIDIELLA, Judit. University of Barcelona (Spain)

BASSAS, Assumpta. University of Barcelona (Spain)

MARICHALAR-FREIXA, Eva. University of Barcelona (Spain)

RICART, Marta. University of Barcelona (Spain)

「オーバーフローする大学：身体化された学びに向けて糸を手繰り寄せること/ごく自然に関係をケアすること」(スペイン)

大学で学生と行った様々な実験的アートワークによるABR実践。テーブルに砂を巻いて腕や体を大きく動かして砂絵を描く、階段を登りながら足の甲に砂をかけ一段登ると砂に型取られた足跡ができる、男性が女性の下着を洗っているなど、行為が浮かび上がらせるものや問題提起など、多数の試みの総体が一つのABRを形づくっている。こうした探究を通して何かを手繰りよせようとしているように見え、おびただしい挑戦(実践)の数々はまさにオーバーフローと言える。

(28) Teach me something – Perceptions of place as a basis for cultural understanding.

HÄRKÖNEN, Elina. University of Lapland (Finland)

「私に何か教えて：文化的な理解の基盤としての場所の知覚」(フィンランド)

フィンランドなどの北極圏地方ではグローバリゼーションに対して独自の自立した文化をいかに保持するかが重要な課題となっており、自然環境とつながった美術教育実践が活発であることは先にも述べた。ある場所での子どもの文化横断的な知覚体験を研究する中から、ローカルな文脈の中での典型的で小さなつかみどころのない、日々場所に対する感覚を生み出すような、人口構成では大多数以外の人々にとっての、大きな歴史的遺産としてではない、そんな「場所づくり」が美術教育において重要であるとする。日常性と個性について美術教育がどのようにアプローチできるか

が、グローバルな問題状況において重要な取り組みになるのだという。

(29) Mapping the moves in post-qualitative arts based research: floating as a way of moving, learning and becoming. CORREDERA-CABEZA, Miriam. University of Barcelona (Spain).

HERNÁNDEZ-HERNÁNDEZ, Fernando. University of Barcelona (Spain).

「ポスト質的ABR研究における動画の地図化：ムービー、学習、生成としての浮遊」(スペイン)

ABRにおける質的ものの考え方や捉え方についての研究である。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』<sup>6</sup>の光や影などの捉え難き質にインスパイアされたとし、探究過程で起こった出来事やそこでの質的特性に対する記述などが探究過程の時間軸の中に詳細に書き込まれ、その展開がグラフィカルに示されていた。先の動画を使った概念の展開についての発表もそうだが、若手研究者は様々なテクノロジーを用いて捉え難き質に迫り、視覚化し理解するためのアプローチを生み出そうとしている。視覚的にもとても美しい発表映像である。

(30) Repetition and the Random in the process of engraving: thinking the idea.

PALAU-PELLICER, Paloma.

AVARIENTO, Maria. University Jaume I of Castellon (Spain)

「エングレーヴィング(版画)の過程における繰り返しとランダムさ：アイデアを考える」(スペイン)

版画制作の創造的プロセスの中でどのように探究が可能になるかを考察した。学校での抑圧的な経験をモチーフにした版画制作過程からヴィジュアル・ナラティブを創り出す実践や、切り出したコラージュで立体作品をつくる実践からは、イメージがマテリアルと思考の間をつなぐと述べる。

美術制作とは本来探究的であるが、だからといって実際にそれがどう探究となっているかを検証することなく自身の表現活動を「探究」と安易に言うべきではないと考える。その点で版画制作を例にどのように探究過程が生まれるかを考察した点は重要である。

質問では、本発表は制作の探究過程に焦点が当たっているが、エングレーヴィングの行為が生み出す感覚的な側面(sensory aspect)には目が向けられていないのではないかと指摘があった。探究過程自体は様々な体験や状況が分かち難く結びつきながら展開しており、全てを捉えることはできないとしても、何をどの

ように意識化していくのか、それをどのように捉え、示そうとしているのかを提示していく説明が必要であろう。

(31) The role played by artistic production in the structure of research and its repercussions in determining the type of research presented.

MARTÍNEZ-MORALES, María. University of Jaen (Spain)

VICO-PRÍETO, Antonio-Félix. University of Jaen (Spain)

「研究の枠組みの中で行われる芸術作品制作が演じる役割とそれが研究様式の決定に及ぼす影響について」(スペイン)

AR(Artistic Research)の構造及びARがいかなる条件によって行われるかについてエレキギターの即興演奏による音楽表現の形式を採った発表である。ARでは「パフォーマンス自体がリサーチである」とし、「人はどのように音楽を知覚し受け取るのか」について、即興演奏中の聴衆とのインタラクションから知覚し、「私(発表者)はその答え(聴衆からのリアクション)を聞いており、私の音楽にそれが影響しているのだ」と述べる(括弧内は筆者追記)。ARでは芸術表現の形式を採った探究と研究発表(研究の表現)があり得るわけだが、今回の発表の大半は即興演奏であり、上記のコンセプトは演奏後に説明され、質疑を通して明示された。しかし本発表に関していえば、突然の演奏から始まる音楽でもってそれらを理解することは難しいというのが筆者と周囲の反応からの率直な感想である。

(32) The (queer) struggle of Pakistan: examining artistic modes of resistance and Dialogue.

QURESHI, Abdullah. Aalto University, Helsinki (Finland)

「パキスタンにおける同性愛者の葛藤：抵抗と対話の芸術様式による調査」(フィンランド)

LGBTや同性愛を欧米では絵に描いてきたように、2010年代に入りパキスタンでも少しずつトランスジェンダーの権利が認められるようになってきている。植民地時代の様々な問題が残っているポストコロニアル下のパキスタンにおいては、こうした人々が表現できるのがアートという場であるとし、同性愛について具象的に描く絵画制作の取り組みなどが紹介された。

(33) Brittle Star Intra-action: A/r/tographic Research and Diffractive Movement.

SORENSEN, Michele. University of Regina (Canada)

TRIGGS, Valerie. University of Regina (Canada)

「クモヒトデ類の内部行為：アートグラフィック研究と

### 回折効果」(カナダ)

クモヒトデ類の行為についての探究過程をアートグラフィーによって省察的に描き出す実践を示しつつ、人間以外の動物を包摂したポスト・ヒューマニティの視点を視野に入れたABR/ABERの方法的・目的的な分類と学術的要件の説明を試みた。日本の教育学においても矢野(2017)が近年の教育学における生命論的転回によるポスト・ヒューマニズムについて、人間と動物の境界分けの論理の変遷を追いながら教育原理の今日的可能性を探っている例がある。こうした昨今のテーマの背景には、DNAレベルの生命コントロールや一個人の権利や倫理を大きく超える政治的・経済的な欲望、他者や環境への影響と支配の拡張に対抗しうる人間の再概念化が求められる状況があると考える。こうした中で本発表の提起するポスト・ヒューマニズムとABR/ABERの接続についての検討は非常に重要な問題提起である。そこに何らかの有効な知見を示すまでには至っていないが、今後の発展的な研究が期待される。

(34) A classroom as a space of desires. 'Social A/r/tography' Visual projects in schools in the margin of Tegucigalpa. MARIN-VADEL, Ricardo. University of Granada (Spain) ROLDAN, Joaquin. University of Granada (Spain) ARIAS-CAMISÓN-COELLO, Alicia. University of Granada (Spain)

「希望を生み出す空間としての教室：テグシガルパ(ホンジュラス)の周辺地域の小学校での社会的アートグラフィーによる視覚表現の実践から」(スペイン)

中米ホンジュラスの首都テグシガルパの小中学校での芸術による探究的実践の紹介。周辺化する人々をアートで支援するNGO「ACOES」(1993年設立)の要請で、小中学校のカリキュラム開発のために「Bombe Arte」<sup>7</sup>(芸術的な力の爆発)プロジェクトが実施された。子どもたちは学校に通う生徒も少なく、映画や美術に触れたこともない。様々なアートの実践を行いながら写真やiPadでその過程を記録し、子どもたちとの美術的な実践を映像などの視覚表現によるアートグラフィーとして広く共有し発信している。「Social Education」と「Participatory Action Research」「Social Participation Art」を統合した実践理論を持つ。地域の子どもたちのアートによる学習を様々な視覚的記録や語りのプロセスを通して省察し、それらをソーシャル・アートグラフィーとして発信していく美術教育カリキュラムの内容と方法論を提起している。個人の美術制作に基づく探究や省察的記述としてイメージされるアートグラフィー

に、ソーシャルな技法としての可能性や、解放とエンパワメントに向けた学習への応用可能性を模索した点で興味深い。

先ほどのブラジルからの発表：(8)「うんざりするほどたくさん詩：ブラジルにおける基礎教育課程でのアートグラフィー」でも、学生が大学や社会の様々な場所でアートの表現やプロジェクトをとおして世界と交渉し、自分たちの声を発信していく実践がビジュアル・アートグラフィーとして試みられていた。こうした抑圧からの解放と社会形成への参画は中南米の社会状況の中で重要な教育の目的となる。表現に向かう探究的な活動を通して潜在する問題状況を認識(視覚化)し、それと自己とのあいだの関係性を省察し、それを協同的な対話とナラティヴの交差によってグラフィーとして織り上げつつ発信し、自分たちの可能性を切り開いていく力にしていくプロセスは、アートによる「ビジュアル」とアートグラフィーの「ナラティヴ」が結合したものである。ポストモダン思想をベースに持つABRやアートグラフィーは扱う体験や知の断片性、多元的な探究や語りなどの個別的な「自己」の範疇を越えていく実践理論をいかに持ち得るかが課題の一つであると考えますが、こうした取り組みにその可能性の一端が見えてくる。

興味深い発表であるが、プロジェクトメンバーがテグシガルパを去った後はどうなるのか、コロニアリズムの問題はないのかといった質問が寄せられた。地元NGOや学校と協同し、活動がよりこの場所に合った形で根付くように取り組んでいるという。実際にアートグラフィーを学校教育に位置付け、個と社会的文脈との間を架橋する実践として注目すべき研究であろう。

以上、ABRとAR、アートグラフィーなどの様々な実践と研究が発表された。理論や実践領域、方法的な拡張を図る取り組みが見られた一方で、新たにABRに取り組み、理解の途上であるものや、明らかに異なる理解や目的によってなされたように見える研究もあった。しかし、様々な立ち位置や角度からこの議論にコミットすることで、ABR自体が構築(同時に脱構築)せられていくことや、たえず芸術や芸術教育、他の学問領域との間での再配置化がなされている。研究や実践の成果を発表している場ではあるが、同時にこの場にそれぞれの試みやアイデアを持ち込みながら、会場全体でそこにどんな発展や新たな着想を見出せるかを試みる場となっているように見えた。複数の教室に発表を分散させずに多種多様なものが混在し、一部屋で

全員の議論に参加する仕組みもそうしたスタンスを表しているように思えた。カンファレンスとはライブな知の創出の現場であるということなのだろう。

## 5. TATE EXCHANGEによる展示とワークショップ

今回はテート・ギャラリーが開設したテート・リパブルが会場であったこともあり、2階のギャラリーと会議室を使ってABR作品/研究や実践が展示され、ABRの取り組みの一部に参加できるワークショップスペースも用意されていた。それらの取り組みの写真やテキストを事前に編集して作った冊子も用意された。研究発表のみならず展示やワークショップが現在進行形で組み込まれることで、知の創出や探究活動に実際に参加して体験出来る仕組みになっていた。こうした企画によってABRの理解について話し合ったり、確認したり、発展させたりしながら、可能性を広げていくことができる。世界中から人々が集うカンファレンスの場自体がやはり一つの協働的で実験的な知の創出の現場なのであり、ABR的だと感じた。



図1 カンファレンスの交流会場に集う参加者

## 6. 本カンファレンスから見えて来るABR&ARの現状と課題

では、こうしたカンファレンス全体を振り返って見えてきた動向とは何か。まず、従来から取り組まれてきた大学教育でのABR実践に加え、1) 学校教育での実践も少しずつ増えてきたこと。2) ABRの受容と広がりの中でABRの理解にも様々なズレが見えてきたこと。一方で、3) 若手研究者による探究プロセスの視覚的表現といった新たな挑戦が見られたこと。4) 従来からの芸術制作/実践をそのままABRと見なすことの危うさ。5) コミュニティでのアクションリサーチという現実的な社会的実践への拡張。6) 差別やアイデンティとの対峙といった現実的な個人的かつ社会

的問題へのABRによる関与。そして、7) 人々をABRへ関与させるものが何なのか、なぜABRによる取り組みへと自己を接続していくのかという「ABRを行う理由」である。

### 6. 1 学校教育への展開可能性の模索

この一、二年、海外の研究者と話題に上がるのが学校教育でのABRの展開である。現時点では学校での実践事例はまだ少ないが、ABRやアートグラフィーに基づく実践が少しずつ試みられている。

先に紹介したギリシャの小さな島をフィールドにしたアートグラフィーの実践では、子どもたちは自分の島を無意識的に観光のイメージで捉えることに慣れてしまい、島を描いた絵は観光写真のようなイメージの再生産で、絵の中に生活の主体である自分たちが現れることがなかった。しかし、描くことでそのことに気づき、話し、書くことをとおして自己と島(世界)を捉え直していった。こうした取り組みは単に「自分たちの島を絵に描く」だけでは気づけない、認識の枠組みの変化と自己の変容を生み出している。描画と対話と記述を織り上げていくアートグラフィーによる記述的アプローチが探究のプロセスを生み出し、支えていた。

ブラジルやホンジュラスでの事例でも、子どもたちが自分たちと周囲の環境や社会状況との緊張関係を、表現活動を通して捉え、文脈をずらし、軽やかに、そしてパワフルに乗り越えていこうとするユーモア溢れる実践を展開していた。この場合もABRとしての自己と環境や文脈との間の探究と省察と表現活動に加え、そのことをアートグラフィーによる記述と省察、ビジュアルとナラティブを含めた方法によって力強く発信し、自らをエンパワーメントしていた。

こうしたABRによる発見的(heuristic)な探究を通して、子どもたちがナイーブな自己表現や閉じた作品制作にとどまらずに、自己を社会的な位相へとエンゲージさせ、自己と社会の認識を拡張し、芸術の制作や表現や試みによって具体的なアクションを生み出していることは見逃せない。実践例を見る限り、一人ひとりの表現や探究の活動が、芸術制作/実践をとおして遂行されることはABRもアートグラフィーも同様であるが、そこに当事者の声や気持ち、ナラティブを織り込みながら、自身の生の在り様を深く省察し、自身をエンパワーメントしていく取り組みに関しては、アートグラフィー的アプローチにそうした事例がより多く生まれている。そうした言葉の深い関与の仕方は、日本の学習指導要領にある「言語活動の充実」とも異

なる強度を持っているように感じる。

ABRやアートグラフィーが学校教育の美術教育につながっていく際にはリサーチとしての探究をどういった考え方や方法で取り入れていくかが鍵になる。当事者として自覚せずにいる自分の「声」や無意識的に抑え込んでいる「言葉」を引き出すことにもなるのだが、この点は日本で実践する際の難しさになるかもしれない。自己を社会的な存在と捉え、公的な場の中で自己をどう表現し、生きるのか。市民としての公共性や公共空間への社会的・文化的・政治的な関与の考え方や方法についての理解は決して十分ではない。大学生や大人であっても、できるだけ目立たず、他者との差異や個人の意見を表に出さず、周囲の空気に瞬時に同調しなければならぬという状態の中で私たちの多くは日々生きている。良いとは思わないながらもそうした空気や相互（世間）の目に従っている「自分」「たち」にも気づきながら、そこから外れてみるのが難しい。そうした透明な見えない空気で相互に縛りあっている状況下で、固定された身体や認識、関係性をABRが浮かび上がらせ、時に解放させるとしたらどうであろうか。ギリシャ、ブラジル、ホンジュラスの例はそうした解放的実践の例であり、北欧の例は新自由主義の影響下での文化的自立性を考え、何かしらの対抗的アプローチを試みる市民との協同的な美術教育の学習活動であった<sup>8</sup>。もし美術教育の目的や活動がナイーブな自己の内的世界に閉じていたら、また僅かながらの余暇活動の再生産と業界内ヒエラルキーの再生産に終始するならば、こうした芸術のアプローチに私たちは進みえないだろう。他方、ABRを芸術による探究学習の方法論として理解することも可能だが、方法的にのみ導入してしまえば「なぜABRというスタンス（立場）を取るのか」という問いと、ABR成立の背景にある個と社会の抜き差しならない関係性や権力関係、そこに視点を当てた1960年代から1970年代の様々な市民運動の実践理論、当事者たちの声を捉えようとしたナラティブなどの質的研究の問題提起などの背景的文脈との接点は失われてしまう。その結果、そうした不可視の文脈の上に私たちの現在があること、だからこそ芸術という形（方法）でもって探究を行うことの意義と可能性が失われてしまうだろう。

自分を描くことで表面的に分かることや内面への省察、芸術の知識や技能を用いてどんな社会的で生産的な「貢献」<sup>9</sup>ができるかといった美術教育の理論と実践に関しては、現在の図画工作や美術科のカリキュラムでも十分に対応しているだろう。しかし、そもそも「私」や「私たち」、「自己と他者」や「自己と社会」

との関係性の「あいだ（in between）」に潜在する不可視の問題や可能性を、今まではできなかった方法や視点でもって捉え、考察し、何かしらの新たな展開を生み出していこうとするならば、私たちはABR的な取り組みに新たな教育実践のスペースを用意する必要がある。それは人々が生きる術としていかなるアート（技法）を新たに持ち得るのかという問題提起であり、可能性のある一つの挑戦でもあるのである。

そのためには今後、ABRの理解と可能性の開拓が進められ、カリキュラム上の目的と位置付けと方法が具体的に描き出される必要がある。それなしに学校教育に導入することは難しい。しかし方法論としてのみ学校教育に「落とし込む」ならば、単なる実践方法や美術教育実践の新たな呼び名の一つとしてあつという間に消費されてしまうだろう<sup>10</sup>。それはABRの取り組みの蓄積を無に帰することになり、重要な生きる術としての技法の一つ失うことになる。まずは少しずつ先行する実践を手掛かりにして学校現場での取り組みを蓄積し、徐々に理論と実践のための条件準備を進めていく必要がある。

## 6. 2 ABRの広がりとは本質的な理解のズレ

次に目に付いたのは、ABRとは言い難い、むしろABRが対峙してきた逆の立場からの研究の目的と方法による発表がいくつかあったことである。ABRの広がりや必ずしも概念や実践の理解を伴うものになっているとは言えない状況が垣間見えた。それらは通常自然科学的な実証主義のエヴィデンスを重視する研究方法による教育学研究と同じものとなっているものもあり、ABRやARの形跡が見えない。ABRは質的研究との結びつきも強いが、量的研究と質的研究のいずれかにのみに与するものではない。それら異なるパラダイム間に位置することができ、それらをつなぎ、あるいはそこにオルタナティヴを示そうとするものでもある。今回のいくつかの研究は歴史的にABRが乗り越えようとしてきた問題への理解が十分ではないせいか、芸術の特性や人間の感性的認識の特性をスポイルしてしまっているように見える。結論もABRの問題提起以前の状況に回収されてしまっているように思える。

なぜこうしたことが起こるのか。おそらく芸術制作/実践、芸術教育、教育学以外にも、心理学、認知科学、教育工学などの様々な分野から新たにABR研究やカンファレンスに参加した研究者たちがABRに関する基本的な理解を十分持たずに、表面的に「芸術に関する・芸術を手段として用いる = Arts-Basedな研究」と誤解し、ABRのこれまでの歴史や対峙してきた問題

の理解を無視している可能性が考えられる。当初から ABR の議論を牽引してきた研究者 (大学) のラボに在籍している若手の発表にはそうした発表は見られなかった。また、そうした研究発表は当然ながら従来のパラダイムに依拠したものとなり、なぜ自分の研究が ABR という視点に立って行わなければならないのかが見えてこない。依拠するパラダイムの大きな違いに気付かないままに質問を投げかけ、議論を混乱させているような状況も起こっていた。

カンファレンス自体が ABR/AR と銘打っている以上、それが何なのか、自分の実践や研究とどういった位置関係にあるのかを考える必要がある。まだ理解の途上にいる段階で ABR に関して何かを試み発信することはあるだろう。他分野で研究を蓄積してきた者がその領域の前提に立ったままで解釈し、独自の理解と目的で用いようとすることも起こる。芸術への理解一つとっても、芸術を研究上の選択可能な内容や手段の一つと見ている研究者もいるだろう。近年ではパトリシア・リーヴィー (P. Leavy) が芸術に基づくリサーチメソッドをまとめた書籍を複数刊行しており (Leavy, 2015; 2017a; 2017b), 「Arts-Based」の実践と研究が新たな研究のパラダイムとなりえる (Lolling, 2013) として、方法論的な広がりも生まれつつあるようにも見える。美術/芸術制作/実践や美術/芸術教育のみならず、社会学や教育学など学問分野にもこれまで以上に広がっていくことが予想される。そのことによって様々な学問領域の知の在りようが更新されることは重要であるが、ABR がそもそも何を問題にしてきたのか、そこにどんな研究が積み重ねられてきたのかを理解しなければ、ABR は単に美術/芸術を用いた研究の便利な代名詞として誤解され、発展の可能性を失ってしまうことが懸念される。

ABR を立ち上げてきた主要な現場に近い場所で学ぶことができる限られた者を除けば、現段階では多くの研究者は書籍や論文を手掛かりに間接的な情報や誰かの試みを ABR として理解しながら徐々に理解を形づくっていくことになる。数年前と違って入門書として読める海外の文献も増えてきているだけに、再度 ABR の理論を辿りながら確認することと、理論の受容と実践の地図的広がりを整理・確認する必要があるだろう。カンファレンスはそうしたズレも含めて様々な可能性を検討し、確認や修正が行われる機会にもなっている。そうしたズレが一体何なのかを問うことも ABR の現在進行形の議論を形作っており、今まさに「生成している」ABR のダイナミズムを見ることができるといえる。こうした状況は今後の日本でも予見されるだけに、海

外のこうした状況にも引き続き注意を向けていきたい。

### 6. 3 ABR の生成的な動態を描き出す若手の研究

若手研究者が生成的な探究プロセスを捉え、その視覚的表現の開発に取り組む例もあった。WICKS, Jennifer. Concordia University (Canada) と、CARRASCO-SEGOVIA, Sara University of Barcelona (Spain) による「理解をなぞる：地図制作的な探究を通じた研究の関連性の発展」では、動きや感情、身体、作品、非知の知など様々な情報や概念、一連の出来事が、リズム状に生成し展開していく探究過程を、文字 (概念) と矢印の動きによるムービーを用いて表現していた。プロセスの中で生まれた新たな問いや気づきによって矢印は移動しながら探求の軌跡 (線) を重層化させ、ABR が編み上げられていく過程を視覚的に表現していた。

CORREDERA-CABEZA と HERNÁNDEZ-HERNÁNDEZ, Fernando による発表 (29) 「ポスト質的 ABR における動画の地図化：ムービー、学習、生成としての浮遊」では、長期間の ABR 全体を時間軸と活動軸の二次元的な大きな座標の中に描き出し、可能な限りその全体性を表現しようとする研究も示された。

いずれも若手研究者による動画でのグラフィカルなプレゼンテーションで、複雑な ABR の生成的な探究過程を描き出す試みである。時にホリスティックと言いつつも、そのプロセスの理解につながる研究や表現方法の模索も必要である。表現する道具や技法が変われば状況や問題の見え方や生み出される理解も変わってくる。カンファレンスではそれぞれがアイデアや試みを持ち寄り、議論する場となっており、創造的な実験場となっている。

### 6. 4 従来からの芸術制作/実践をそのまま ABR と見なすことの危うさ

先の問題点にもあるように、ABR の特徴でありながらも、ABR について理解することを難しくしている理由とは何か。おそらくその一つは、それが形式的には馴染みのある、従来から私たちが行っている芸術制作/実践と変わるところがないように見える点にあるのではないだろうか。確かにどんな芸術活動にも広い意味での探求/探究が含まれているために、ともすれば ABR とは懸け離れた芸術制作/実践であっても自分の芸術制作/実践における探求/探究が ABR と同じに見えてしまう場合があるだろう。もちろん実質的に ABR であるものも多々あるはずだ。しかし注意しなければならないのは ABR の理論的背景の理解がなければ

らゆる芸術制作/実践がABRと同一視されてしまう状況が生まれる懸念があることである。そうなればABRはその理論的・実践的な効力を失ってしまうだろう。そうした概念がない時代に行ったものを遡ってABRと見なしてしまうことも危うさがある。既にABRを冠した今回のカンファレンスでさえもABRやアートグラフィックと言われても明らかにそうではないものはいくつも見られた。特に芸術家の表現活動や作品だけが前面に出されたパフォーマンスなものなどは、それがなぜABRなのかの判りにくかった。形式としてパフォーマンスな実演を行うことは理解できるが、それがどんなリサーチで、結果がなぜ作品や表現という直接的な芸術制作/実践の形式で示される必要があるのかも受け手に理解されるか、それがある程度の確率で直観的に把握されるか、あるいは言葉や理論も併せて提示されなければABRとして成立していると思わすことは難しいのではないか。それがなされなければ、これまでのABRの取り組みは無に帰してしまい、芸術は新しい知の創出に関わる重要な契機を逃してしまうことになる。ゆえに芸術制作/実践が含む持つ広い意味での探求/探求的要素をもってそれらをABRと結びつけてしまうことには危うさがある。ABRの理論と実践を理解しつつ、自身の芸術制作/実践と突き合わせて吟味してく慎重さが求められる。

ABRは必ずしも芸術制作/実践の専門家による実践の論理だけで形づくられてきてはいない。美術、詩、写真などの多様な表現形式はもちろん、芸術/美術教育を始め、教育学や社会学などの人文・社会科学の知見とも交わりながら発展してきた。少なくともABRが芸術制作だけでなくリサーチである以上は、他の人分・社会科学研究を行う場合と同様に、ABRが歴史的にどんなパラダイムや問題に対峙してきたのか、芸術や教育がどんな学問的な闘いを繰り広げてきたのか、その目的や方法論的な問題、限界は何であったのかを踏まえた上で、自分の実践がどういった意味でABRの問題意識と重なるのか、なぜABRとして行われなければならないかを自覚的に理解して取り組む必要がある。もちろん全ての要件が人文・社会科学等と同じではないとしても、少なくともその自覚を欠いたならばABRは他のアプローチに対して有効性を示す上での基礎的要件を欠いてしまうことになる。ABRが新しい知の有り様と知の創出の方法として、従来からの芸術制作/実践に新たな角度から光を当てるものであることは確かである。しかし、「ABRとして」自分たちの芸術制作/実践を語り得るのは、こうしたABRの理解を経た「後に」始まった制作や実践か、あるいはABRと

しての適切な解釈を付された上で示された場合に限るのではないだろうか。今回のカンファレンスでの理解のズレを見ているとやはりそう言わざるをえない。外来の理論としてABRを迎える日本ではこの点には特に注意を払わねばならない。小松が示すようにABRが含むもの、例えば「芸術的省察」とは一体何であり、それは自分の芸術制作/実践に含まれ得るのか、そもそも自分の作品制作/実践が問うべき探究を明確に持ち得ているのかなど、ABRの理解や実践の要件整理なども行いながら取り組む必要がある。

このことはAR (Artistic Research) でも同様である。スペインのMARTÍNEZ-MORALES, Maria. University of Jaen (Spain) と、VICO-PRIETO, Antonio-Félix. University of Jaen (Spain) によるエレキギターによる即興演奏の例で、それがどんなARだったのかが演奏の後に知らされたが、リサーチの目的や演奏を用いる理由、生の演奏の現場に私たちも参加している探究の中で何が生まれたのか。それを分かるように示す必要があったと感じた。そこにどんな「問い」が提起されているのかが何かしらの形で示されなければリサーチとしては認識されず通常の鑑賞となる。ABR/ARとして行われるだけに一層その方法に疑問が深まる。ABRにおいて参画性は重要な要件でもあり、聴衆がどのように参画するかがリサーチ・デザインの段階で考えられる必要がある (Leavy, 2015)。

通常の研究では事前にインフォームドコンセントの確認がなされるが、探究過程の長いABRやARなどはどこから始まりで、どのタイミングで明確な参加者という関与者が誕生するかも予想できないものもあるかもしれない。そうした区切りがわかりにくいとしても、全てが事後的ではなく、適切な段階でそれらが確認され、共有と合意による共同的な探究へとシフトしていく展開が示される必要があるだろう。研究者と非研究者の関係性を考えれば、誰がABRに参画し構成しているのかということ意識する必要がある。ARは芸術表現が研究としても表現としても直接的に用いられるため、より意識的にその実践が「何らかのリサーチとして行われている」ことが明示される必要がある。

## 6. 5 コミュニティにおけるABRのアクションリサーチから見えてくる芸術家とコミュニティの関係

社会における文化活動は必ずしも芸術制作/実践ばかりではない。様々な社会的な包摂や問題解決、文化の継承や保存と発展、社会的・歴史的な事象の記録や検証など、多様な市民協働の取り組みがある。しかし、

そのように市民が参画し (participate)、創造の主体となる広義の文化活動と、芸術家が行う芸術制作/実践などの文化活動との間には相互交流や目的の共有はどれくらいあるだろうか。例えば市民が地域で何らかの事象や出来事の保存や記録、課題解決の具体的なアクションを通して現実社会にコミットしている場合、その活動は高い直接的な社会性・文化性・政治性を有する。一方で芸術家やアマチュア芸術家の多くが行う自己目的に即した表現の追求や、個人的目的による作品制作によって美術団体や公的施設の制度内で活動を行う場合、これらの文化活動が持つ社会性は、前者とは違いがある。それぞれの立場によって目的や活動内容も変わってくる。生きた現実社会から距離をとった場所で個人的表現の追求を行うことも文化活動である。しかし、市民が直面する地域の様々な社会的・文化的・政治的な問題状況と、そこに生きる私たちに向けて、芸術制作/実践に携わる者は現実的に何を浮かび上がらせ、どんな問題解決の表現やアプローチを行いたいのだろうか。「個人的に自分が望む作品を作りたい」のであれば、ABRといった芸術による探究や、芸術が人文・社会科学あるいは自然科学に比肩する知の創出でありリサーチの方法なのだという議論は、自分たちが知っている (行っている) 芸術活動とは異なるものに聞こえるだろう。芸術を「制作」としてのみならず、間主観的、社会的アクションも含めた「実践」としたほうが、そうした従来の芸術作品づくりからも区別され、ABRがイメージし易く適切かもしれない。

その点でフィンランドや北極圏のABRは、グローバルイゼーションに対抗する地域固有の文化や環境保護、持続可能性についての探究の取り組みを、参加型ABRのアクションリサーチとしてコミュニティへとエンゲージ (関与) していく実践がなされていた。環境保護や環境教育に芸術や芸術家関わって何かをつくるということだけではなく、ABRという芸術に根ざした取り組みだからこそ浮き彫りにでき、可能性が開かれるものを市民と共に追求し生み出していこうとする実践的で直接的な芸術による探求活動である。こうしたABRとアクションリサーチの統合は、ABRの側からSEA (ソーシャリー・エンゲイジド・アート) との間を架橋するポジションに位置する取り組みとも言える。コミュニティを取り巻く文脈に起こる外的状況変化を捉えながら、状況とアプローチ自体も拡張的に更新していくことはエンゲストロームの活動理論とも関連する (笠原, 2018)。いくつかのABRやアートグラフィックはそうした変革型学習の例でもあった。

少なくとも日本で生み出される芸術活動の多くはコミュニティの問題からは切り離された個人的な表現活動が主流であり、現実社会の問題にコミットする意識と方法論が根付いているとは言い難い。こうした現実のコミュニティの問題に芸術で関与する方法として芸術を捉えていくといった視点は希薄であるが、ABRを始めとする海外でのこうした取り組みは、現実の問題解決において芸術が成し得ることは何なのかを問い続けてきており、その取り組みは着実に積み重ねられてきた。各国で芸術/芸術教育の位置付けや形、内容も異なるが、ABRに関しては情報レベルでのキャッチアップ以上に、こうした試行錯誤の蓄積の有無がまだまだ大きい。その知的蓄積の共有だけでなく、日本での導入可能性の批判的検討と、そうした社会的文脈とのエンゲージメントも含めて、日本の文脈での具的な在り方を探索していく必要があるだろう。

## 6. 6 差別とアイデンティティへの自覚的取り組み

もう一つこうした動向と日本との間の違いとして挙げられるのが、社会の中の様々な差別や排除といった問題に対して、ABRを行う芸術家/研究者/教育者が自分自身のアイデンティティに関わる生きた問題として取り組んでいる点である。ビザが発給されなかった発表者の訴えはもちろん、ある参加者と夕食を共にした際にはパスポートの信頼性のランク付けと対応の差を感じるといった体験が会場に着くまでの間にもあったという。数日間の会議に集まる中でも参加者は様々な形でそうした問題の当事者となっているのだ。また、アカデミックな場で自分の研究を発表することができるとい立場が植民地政策の歴史の上に形づくられたアドバンテージの上に成り立っている場合もあるといった話も聞かれ、個人的な努力だけでは成しえない歴史的・文化的・経済的・政治的な諸条件によって社会的達成を得ていること、それから遠ざけられていること、そうした文脈への自覚や無自覚、その責任をそれぞれが現在において (未来に向けて) どのように引き受けるのかといった議論が夜遅くまで交わされた。ABRは他の方法では捉えがたいものを芸術の特性に根ざして浮き彫りにする探究的实践であるだけに、「今」を問いながらもそこに「社会・文化・歴史」といった垂直的な時間軸での文脈の自覚的な問い直しが幾重にも入り込んでくることになるのである。私たちは自分の周りにあるそうした「問うべき問い」にどれほど気付いているだろうか。そうした問うべき問題と私たちが今行っている芸術や教育の活動のあいだのつながりに、気付いているのだろうか。



## 6. 7 自己をABRへ関与させる (ABRを行う) 理由

芸術活動を行う動機が、作品を作りたい、作ることが楽しい、上手にできることで褒められたり、満足感を得られるといった、制作自体が目的化している場合にはABRのようなアプローチは理解しがたく縁遠いだろう。自己表現も自己の探求や省察は含まれるが、そうした探求とABRは重なるようである。これまで何かしらの芸術活動に従事してきた者がABRと出会ったとき、そうした目的では説明できなかった自身の取り組みが、実は芸術の形式によって為される「リサーチ」だったのだと解って何か腑に落ちる気がすることがある。作品を作ることそのものの喜びや自己表現、コミュニケーションの手段、といったものとも異なる動機や目的を語る言葉があるようではなかったわけである。理由は個々に様々であるとしても、図らずもABRに取り組むことになった人々はなぜにこうした芸術によるリサーチ (研究や探究) に関与することになるのだろうか。

前回のカンファレンスのある発表で、日本とブラジルに滞在し、両国相互の移民のアイデンティティを考察したABR実践に対してある質問がなされた。日本からブラジルへの移住することと、ブラジルから日本へ移住する場合では、日本のような同質性が高い国 (homogeneous) へと移住する方が困難は多いのではないかと、適応が大変なのではないかと、という質問である。それに対し発表者はいずれも困難はあって比べられるものではないと述べていた。移民についてのABRであったが、聞いていると国内にいる者同士のあいだにある、目に見える明らかな差異とは異なる表面化されにくい同質性の中の差異を生きることへの抑圧や困難が思い起こされた。確かにそうした生きづらさはあるのだが、それと芸術/美術教育はどう関係してきたのだろうか。ABRは相互の差異と同質性の問題に踏み込まない、安全でナイーブな実践にとどまることは難しいだろう。

今日様々な差別や排除、分断する言葉や表現が私たちを取り巻いているが、ABRは私たちがそれぞれに違った角度から相互にマイノリティであることの自覚を促すことになるのではないだろうか。なぜならばABRは私たちが無自覚に知覚するものに省察 (反省) を加える実践となるからである。既にそうした省察を加え行動の中で解決を模索する姿や実践をこれまでの報告の中に多数見てきた。様々な問題の当事者性や問われるアイデンティティの問題がABR実践を生み出し、そのことに対処する思索的かつ現実的な可能性を

押し広げていったわけである。

私たちの中にある何かしらの違和感や感覚のズレにABRの何かはずかでも触れてそこに共振が感じられた時、理由はわからないながらも私たちはABRに何らかの可能性を予感し惹きつけられるのではないだろうか。「自己」はABRやアートグラフィーにおいて重要な概念であり、アートで何かを問 (Inquiry) わずにはいられなくなるような私たちを突き動かす共振の元となる当事者性の根源である。しかし、ABRにおける自己は先ほどから述べている個人の枠内で完結するナイーブな自己表現とは異なる射程で論じられる。自己を、自己と環境との「あいだ (in Between)」の未だ明確に捉えることのできない「何か」を、様々な表現をとおして捉え、そのこと自体を、その社会的文脈をも露わにし、何かしらの問題性の提起や、問題解決に向けた改変をも試みるのがABRの射程となる。必ずしも主張し行動する自己を初めから要請するわけではないが、探究のプロセスのなかで自己が、自己と他者が、環境や社会との関係のあいだ (in/in between) で変化し、少しずつ以前の自己とは異なるものへと変容していくことになる。それがABRによる変容的なエンパワメントである。

アートグラフィーなどの記述的省察の方法が採られる場合があるのも、こうした現在進行形の複雑で曖昧な自己を含み込みながら、幾重にも絡み合っているコンテキストの中で探究の歩みを捉え、思考し、未だ見ぬ探究の先へと歩を進める現在進行形と地図制作の有効な技法だからである。そうした自己と他者、社会とのあいだの抜き差しならぬ「生きた探求/生きることと共にある探求」(Living Inquiry) (Irwin and Cosson, 2004) とその軌跡の形がアートグラフィーとなる。

言葉や形にしがたい問題や困難は無自覚的にも私たちの中に潜在しており、そうした不可視の「何か」と私たちとのあいだの共振が私たちをABRへと関与させる契機となる。それゆえに、そうした共振が起きない中で、つまり「自己」への省察や関係性を切り離れた地点においてABRを用いようとすれば実質的にそれは、芸術を方法とする一般的な社会科学研究や、芸術の手段の応用となりやすいのだと思われる。もちろんそれも一つの在り方ではあるが、そうした一般化できる方法論として分かったような気になれないところがあるのは、ABRのこうした自己に触れる何かの問題性との深い関係的な部分が理由なのではないだろうか。一般化可能で普遍化可能な知の創出であればABRは不要であり、人々が抜き差しならない問題を抱えつつ出会うといったことも起こらないであろう。自覚し

がたい自己の内と外とのあいだの不可視の共振に、自己完結的な芸術制作/実践とは異なるABRの特性と可能性があるのだろう。

## 7. まとめ

カンファレンスの考察を踏まえて見えてきたのは、海外のこうした取り組みは、人々の個人的な生の局面に対する芸術の関与だけでなく、コミュニティや社会状況とのあいだの直接的あるいは不可視の意識や問題をも浮き彫りにし、それらに新たな視点で再考を促すとともに、解決の具体的なアクションリサーチや社会的実践を生み出している多彩な取り組みがなされているということである。芸術制作/実践、理論研究、参画型の実践など、芸術制作/実践のリサーチとしての目的や方法が様々に検討され、新たな知が生み出されていた。カンファレンスが芸術と教育研究のダイナミックな交流と創造の場となっていた。

いずれの発表もそれぞれの背景や困難な問題を切実に抱えていた。ナイーブな自己表現としての芸術活動に慣れた目からは、一見すると芸術とは全く関係ないように見える問題に対して芸術だからこそ可能なアプローチが考案され、果敢に関与していく姿が印象的であった。自己を起点として位置付けつつも自己に完結せずに社会的な位相へと接続されている。自己が曖昧であれば対象化されるものも曖昧になる。ABRはこの曖昧なものも芸術の特性によって捉え、そこによりクリアな視界を現出させる。たとえそれが曖昧な領分にあるとしても、それをいかに捉え表現できるかを問うていく意識を捨て去ったならば、自己に向ける眼差しへの甘えを生み出し、結果的には問題を生み出すヘゲモニーを無自覚的に隠蔽することにもつながる。そうした共犯関係の中で歪んでいく芸術と人々の関係や芸術教育の役割に私たちはもう少し自覚的かつ批判的になる必要があるのかもしれない。

また、自己と社会のあいだに芸術を通して関連性を見出すには、社会科学的知識も不可欠である。芸術制作/実践や芸術/美術教育に携わる私たちがより広い情報や教養を持たなければそうした回路を見出せないであろうことも痛感した。社会の中に芸術があることは皆が理解するところである。しかしそれが他分野の知を摂取し、それらと協働し、時には渡り合うだけの知的体力と鍛錬が芸術においても必要であることを受け入れていく必要があるだろう。

だからこそ、私たちはABRの理解を試みる必要がある。ABRが突きつけているのは、これまで比較的自立

した世界に安住できた時代の芸術制作や芸術教育がもはや多くの人々にとっては生きる術としての実効性も可能性も持ち得ていないのではないかという疑念であり、それに対する根本的対処の必要性である。それは他分野の最新の知を取り巻く状況へと芸術制作や芸術教育を接続させることを促し、その交点に現在の意味を生み出す新たな方法論とメタ方法論、新たなパラダイムを打ち立てることである。少なくとも我々が十分にフォローしてこなかったABRという芸術と知性に関する四半世紀の挑戦がなかったならば、私たちの現在と芸術との距離はもはやどうしようもない断絶状態となっていたように思われる。その断絶とは私たちと芸術の断絶であると同時に、一人ひとりの自己と社会のあいだの距離（断絶）への絶望でもあるのだ。しかし、カンファレンスはそうした自覚し難い距離も含め、様々な事象や問題を芸術による探究が捉え、思考させ、何らかの条件変更や改変へのアクションを生み出すことができることを沢山の事例で示していた。そうした可能性を果敢に問う人々が集い、問いや成果や新たな方法を現在進行形で探究する場となっていたのである。

こうした取り組みや出現しつつある可能性をどのように受け止めるのか。さらなる検討が必要ではあるが、カンファレンスから「学ぶ」意識だけでなく、ABRとの出会いを通して日本の視点から見えてくるもの、描き出されるもの、新たな問い、何かしらの問題解決の取り組みを発信していくことへと、ぜひとも参加していくことが重要であろう。まずは私たちの地歩で探究を始めることである。

## 謝辞

カンファレンスでの共同研究発表に取り組んでくれたジュン・フー (Jun Hu) 教授 (杭州師範大学)、日本と中国によるアジアからの発表を提案してくれたリア・アーウィン (Rita L. Irwin) 教授 (プリティッシュ・コロンビア大学) とアニタ・シナー (Anita Sinner) 教授 (コンコルディア大学) に御礼申し上げます。フェルナンド・ヘルナンデス (Fernando HERNÁNDEZ) 教授 (バルセロナ大学) には発表に際して貴重な問いを投げかけていただいた。第四回会議に参加しABR研究を進めている小松佳代子教授 (現長岡造形大学/元東京芸術大学) がまとめた前回会議の論文も参考にさせていただきました。カンファレンスでの発表内容はアートミーツケア学会青空委員会プロジェクト事業に基づいている。プロジェクトで貴重な実践を発表してくれた

高尾隆氏, 吉田梨乃氏, 岩田さや子氏, 春野修二氏, 中村翔太郎氏, 森本謙氏, 助成をいただいたアートミーツケア学会に御礼申し上げる。

本研究は科研費研究基盤研究(B)18H01010「Arts-Based Researchによる芸術を基盤とした探究型学習理論の構築」(2018-2020年度)研究代表者: 笠原広一, 科研費研究基盤研究(B)18H00622「判断力養成としての美術教育の歴史的・哲学的・実践的研究」(2018-2020年度)研究代表者: 小松佳代子, の助成によるものである。

## 文 献

- 秋田喜代美 (2007) 「教育・学習研究における質的研究」, 秋田喜代美他編『はじめての質的研究法: 教育・学習編』東京図書, 3-20.
- Barone, T., Eisner E. W (2012) *Arts-Based Research*. Sage.
- Hiroko, Hara. (2016). *Arts-Based Research in Practice: Towards a New Mode of Address across Harmony and Disharmony*. 育英短期大学研究紀要第33号, 1-11.
- Irwin L. Rita., Cosson De Alex. (2004) *A/R/Tography: Rendering Self Through Arts-Based Living Inquiry*. Pacific Educational Press.
- 笠原広一 (2018) 「美術科教育学の学習論と実践理論の拡張: 学習論・ワークショップ・インクルージョンの関連動向から考える」, 美術科教育学会企画編集委員会永守基樹編『美術教育叢書1: 美術教育学の現在から』美術科教育学会・学術研究出版, 84-97.
- Koichi, Kasahara. (2017). *How Teachers and Students Understand the Practical Methodology of Art-Based Inquiry*. InSEA World Congress 2017, International Society of Education through Art, Daegu, Korea (2017年8月) (学会発表)
- 笠原広一, 山本一成, 坂倉真衣. (2017). 『芸術活動を媒介とした統合的な自然体験を基礎とする幼児教育実践体系の構築』科学研究費補助金(基盤研究(C))平成26年度~平成28年度研究成果報告書(課題番号26381083), 研究代表者: 笠原広一.
- Koichi, Kasahara. (2015). *How Students Learn Arts-Based Approach in Early Childhood Education*. *Critical Approaches to Arts-Based Research: Special Edition of UNESCO Observatory refereed journal, Multi disciplinary Research in the Arts*. 1-26.
- 金田卓也 (2014) 「教育に関する質的研究における Arts-Based Researchの可能性」『ホリスティック教育研究』17, 1-16.
- 小松佳代子 (2017a) 「4<sup>th</sup> Conference on Arts-Based Research and Artistic Research Conference」美術教育研究会, 『美術教育研究』第22号, 85-91.
- 小松佳代子 (2017b) 「芸術体験と臨床教育学: ABR (芸術的省察による研究) の可能性」矢野智司他編『臨床教育学』協同出版, 139-160.
- Kayoko, Komatsu., Lucas, Bonet Redondo. (2017). *Art Education and Qualitative Intelligence: The Possibilities of Arts-based Research*. InSEA World Congress 2017, International Society of Education through Art, Daegu, Korea (2017年8月) (学会発表)
- 小松佳代子 (2018a) 『美術教育の可能性: 芸術制作と芸術的省察』勁草書房.
- 小松佳代子 (2018b) 「美術制作におけるモノの重要性」今井康雄編『教育空間におけるモノとメディア: その経験的・歴史的・理論的研究』科学研究費助成事業(基盤研究(B))成果報告書, 課題番号15H03478 (2015-2017年度)研究代表: 今井康雄. 191-192.
- 高尾隆 (2010) 「演劇教育研究の方法論の現在: 演劇教育研究の質的方法化と質的研究のパフォーマンス化の接点で」『演劇学論集』, 日本演劇学会紀要50, 61-77.
- Leavy, P. (2015). *Method Meets Arts* 2nd Edition. NY: The Guilford Press.
- Leavy, P. (Ed.) (2017a). *Handbook of Arts-Based Research* 1st Edition. NY: The Guilford Press.
- Leavy, P. (2017b). *Research Design: Quantitative, Qualitative, Mixed Methods, Arts-Based, and Community-Based Participatory Research Approaches* 1st Edition. NY: The Guilford Press.
- Rolling, H. J. (2013). *Arts-Based Research Primer*. Peter Lang Inc., International Academic Publishers.
- 岡原正幸・高山真・澤田唯人・土屋大輔 (2016) 「アートベース・リサーチ: 社会学としての位置づけ」『三田社会学』第21号, 65-79.
- 矢野智司 (2017) 「境界線に生起する臨床教育学: 人間/動物を手掛かりにして」矢野智司・西平直編著『教職教養講座第3巻 臨床教育学』協同出版, 13-35.

## 註

- 1 筆者は前回大会から参加しているが, 日本からの参加者は4th (3名), 5th (1名) となっている。4<sup>th</sup> Conference on Arts-Based Research and Artistic Researchについては, 参加した小松 (2017a) が報告をまとめており本論の参考になっている。ABRの説明は後述するが, Artistic Research (AR) の訳は小松による「芸術制作による研究」を踏襲する。
- 2 福岡教育大学教育学部で担当した「美術表現の指導法」にて実施。
- 3 2018年には笠原, 小松ともに科学研究費によるABR研究が採択され, 今後のABR研究の加速が期待される。謝辞参照。
- 4 5<sup>th</sup> Conference on Arts-Based Research and Artistic Research

- ウェブサイト <https://www.5abr-ar-conference.org> (最終アクセス日 2018年4月15日)
- 5 2017年11月11日(土)に東京学芸大学で開催されたアートミーツケア学会青空委員会プロジェクト「アートにまつわる『書く・グラフィー』を考える—実践者としてアートの実践を書くことの意味と可能性—Art/ography 実践研究実践者の力量形成」。日本でのアートグラフィックな実践研究が多数紹介された(発表者とタイトルは以下)。
- ①笠原広一「アートにまつわる『書く・グラフィー』考える」
  - ②高尾隆・吉田梨乃・岩田さや子「俳優・ファシリテーター・研究者の間で生きる」
  - ③春野修二「制作過程を綴ること～作品を取り巻く世界の受容や質的な変化について」
  - ④中村翔太郎「あらわすことで変容する自らへのまなざし」
  - ⑤森本謙「アートグラフィーと詩：UBCでのワークショップの体験から」
  - ⑥笠原 広一「ホントの空を探して：ワークショップの取り組みからのアートグラフィーの実践」
- 6 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』1939年, 創元社(初出1933年)。
- 7 Bombe Arteの動画は以下のサイトを参照。<https://www.youtube.com/watch?v=McusLqsU3LA> (最終アクセス:2018年5月4日)
- 8 同じく北欧からの教育理論であるY・エンゲストロームの活動理論もこうした文脈を理論づけるものとして関連性が見出せる。ユーリア・エンゲストローム(1999)山住勝広他訳『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』新曜社。
- 9 私たちはこのところ様々な場所やメディアの中で、何かに「貢献」できる「人材」であること、そうした「人材」に「なること」を「求められている」ように感じる。「貢献」という表現に特段の違和感も感じず、当たり前のように自らが何かに「貢献したい」とごく自然に、積極的に述べることもあるだろう。しかし貢献は「求められる」のと自分からどんな貢献ができるかを考えて「自ら行う」のとは大きく異なる。立ち止まって考えれば「誰の」「何に」自発的に「貢献」するようになることが求められているのか。「貢献」自体は何かしら良いことに向けて使われることが多いが、その良さ自体が誰にとっての福祉や利益なのか。立ち止まって言外に想定される関係を考え、自己主導性において学習活動を組み立て直すことが重要である。
- 10 「ワークショップ」も本来的な意味合いが十分に理解されずに体験や活動の呼称として広がっている。美術教育実践は確かにアクティブ・ラーニング的な要素が多いが、それをもってアクティブ・ラーニングが無自覚的に含まれていると見なすことも同様の懸念がある。新たな実践理論との異同を確認しながら自身の取り組みを語る言葉を選ぶ必要がある。